《　歴史&宗教　No022　》

密教の曼陀羅絵図に学ぶ

難しい仏教解説ではありません、基本中の基本を旨として私用（わたくしよう）に纏めたものです、イメージ図による遊びの世界です。以下、「密教の本（学研）」等を参考に私見を織り交ぜて整理します。

純密、すなわち正純なる密教の重要なる経典において、真言宗の三部秘経――「大日経・金剛頂経（こんごうちょうぎょう）・蘇悉地経（そしつじきょう）」の一つ『大日経』を図式化したのが曼荼羅（曼荼羅絵図）と云われています。

その１；　山伏や修験道とくれば、自然・霊山を神聖視する古くからの山岳信仰とも結び付いた密教（秘密仏教）について少し触れます。修験者・山伏は、自然のそのままを学問道場とします。日本では、空海（弘法大師）を開祖とする真言宗のいわゆる東密と、最澄（伝教大師）を開祖とする天台宗での台密の二つの系統があった。以下に、密教の説く曼荼羅について「真言密教の本」（学習研究社）を参考にします。

曼荼羅絵図は心を形に表したもの。佛教の教え・理念（特に大日経）を幾何学模様・図式－－円と四角――を用いて説いたものだが、そもそも曼荼羅にはその形態、用途などによってさまざまな分類があります。

曼荼羅には前胎蔵界曼荼羅（絵図）と後金剛界曼荼羅（絵図）があります。前者ジェンダーは女性原理の――宇宙を大日如来の慈悲として表し、『理』の世界（無分別智）を説きます。後者ジェンダーは男性原理の――宇宙を大日如来の知恵の展開として表し、『智』の世界（分別知）を説きます。前者は次頁図－１、後者は次々頁図－２のとおりです。

宇宙の中心仏であり、宇宙の真理仏であり、宇宙万物の慈母仏である「大日如来仏」について、『理』の世界は胎蔵界においては、全体造形の中心部中央に配置し、『智』の世界は金剛界においては、全体造形の上位端部（最上部中間点）に配置しています。この違いに何の意味を込めたのか、私の知り得る限りでは、この疑問にズバリ答えた書籍を読んだことはありません。

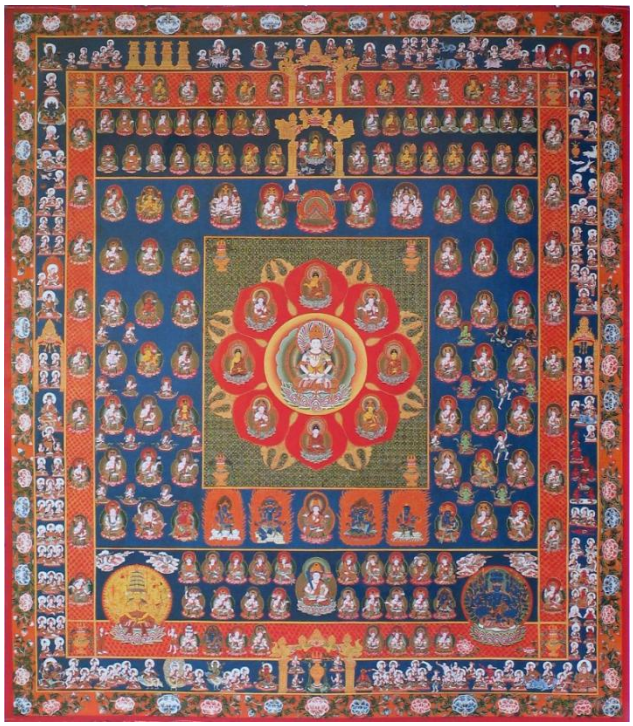
まず、人間の男女性器の位置形状と関係です。

女性の特徴といえば何と言っても子供を宿す力を有すること、つまり、「胎蔵」です、当然ですが、その場所は身体（体内）の中心部中央です、曼荼羅の形状と一致します。

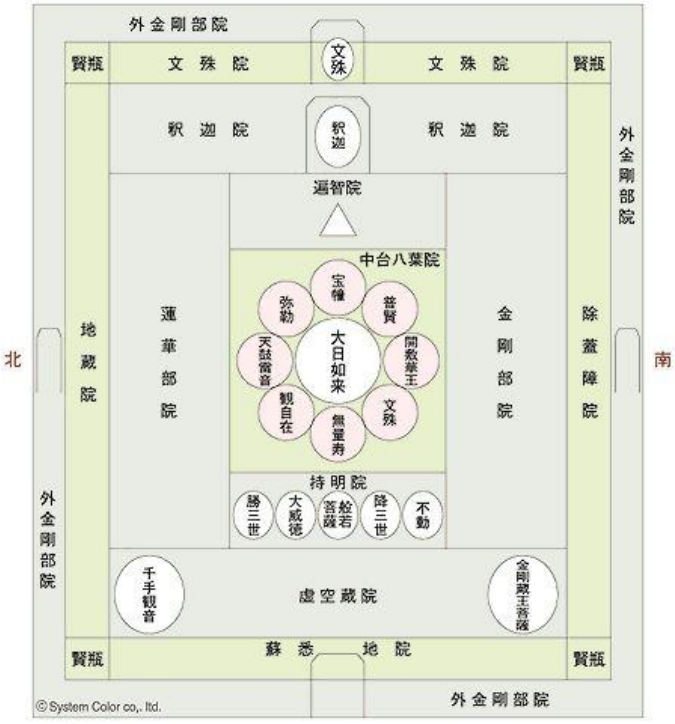
男性の特徴といえば何と言っても子供を宿す前哨（ぜんしょう）（軍隊が敵地の近くに停止する時、警戒のために停止地点の前方に配置する部隊）力を有すること、あるいは、前檣（ぜんしょう）（船の前部にある帆柱）力を有するものであり、来るその時は炎同然の上向きとなります。まさに、上部＝端部です。

さらには、陰陽二元と絡まり、胎蔵界は「無分別智」を希求する「求一還元（きゅういつ）作用」の重要性を、金剛界は正しい「分別知」を希求する「分化発展作用」の重要性を説いたものだと自己解釈しています。

［東］

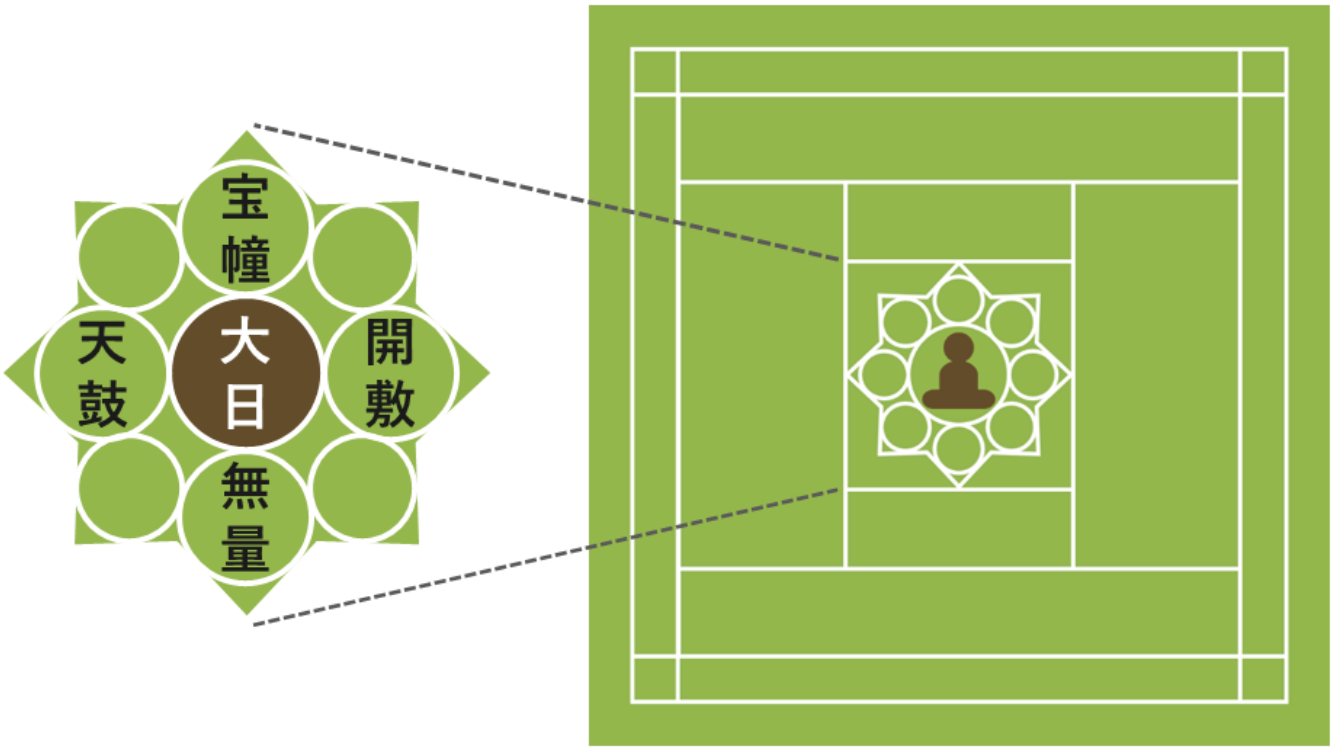


[東]


外金剛部院
賢瓶
文殊院
文殊
文殊院
賢瓶
釈迦院
釈迦
釈迦院
外金剛部院
遍智院
中台八葉院
宝幢
弥勒
普賢
天鼓雷音
大日如来
開敷華王
観自在
文殊
無量寿
北
地蔵院
蓮華部院
金剛部院
除蓋障院
南
持明院
勝三世
大威徳
般若菩薩
降三世
不動
外金剛部院
千手観音
虚空蔵院
金剛蔵王菩薩
賢瓶
蘇悉地院
賢瓶
外金剛部院
© System Color co,. ltd.

［西］

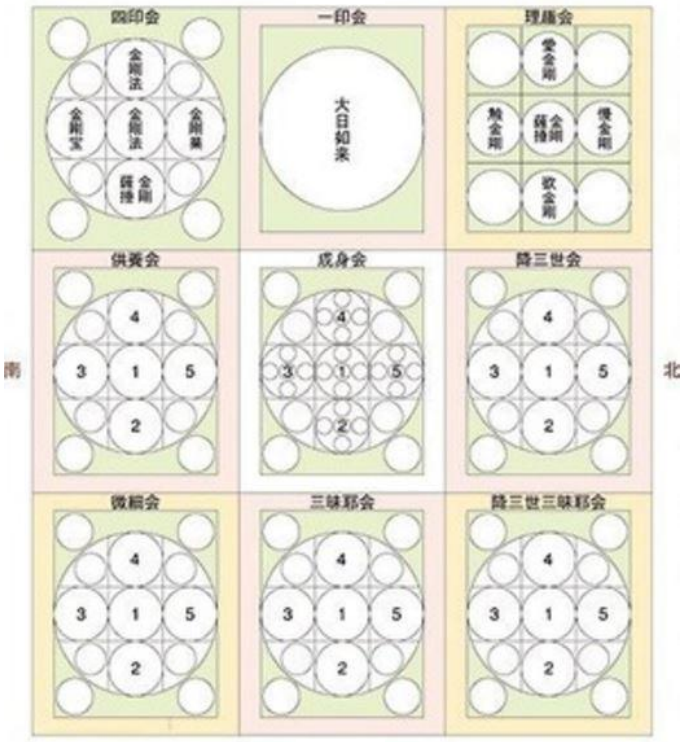
[東]


宝幢
天鼓
大日
開敷
無量

図－１（胎蔵界）

［西］

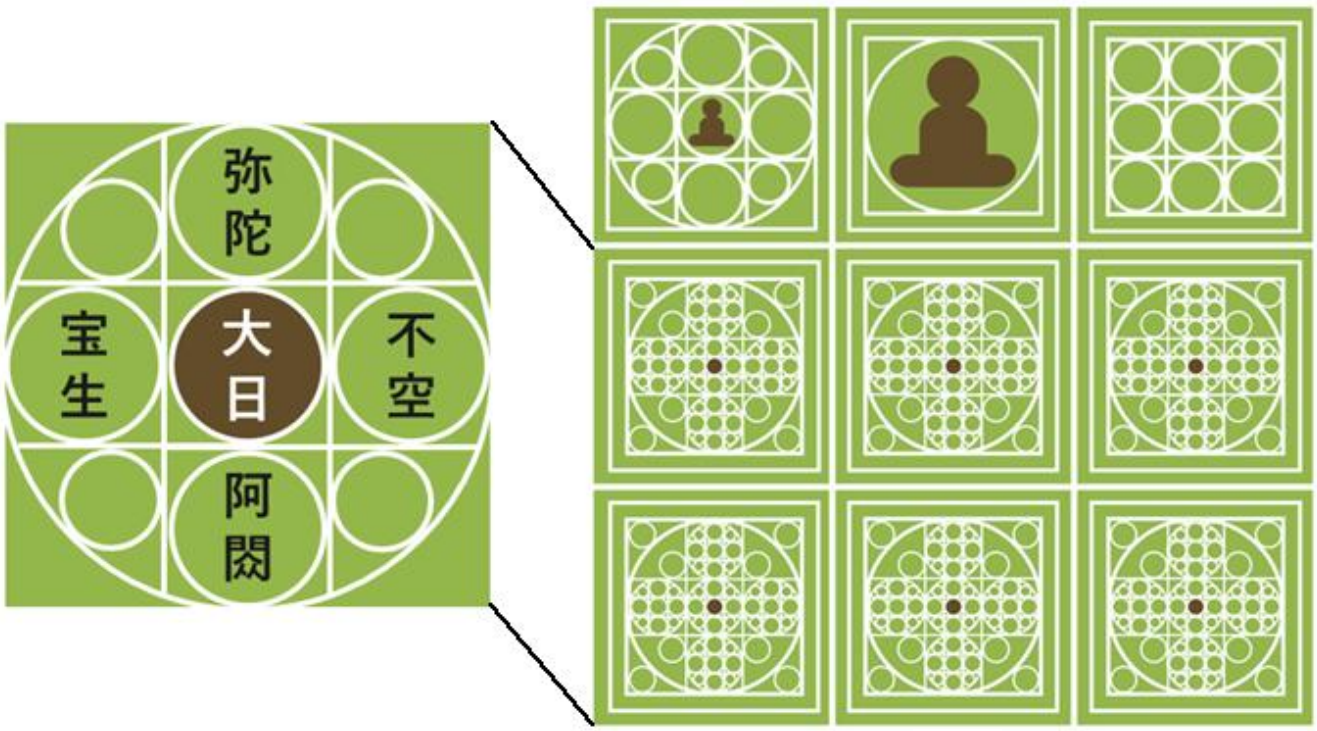
[西]



[東]

①大日如来
②阿閦(あしゅく)如来
③宝生(ほうしょう)如来
④阿弥陀如来
⑤不空成就(ふくうじょうじゅ)如来

［西］



[東]

図－２（金剛界）

その２；この金胎（両）曼陀羅絵図を本堂や灌頂堂に祀る場合の向き（位置）ことです、一対掲示を基本とします。

「http://tobifudo.jp/newmon/index.html」には「本尊に向かって左側に置かれるのが金剛界、右側に置かれるのが胎蔵界です。理論的には、左右という表現より東向き、西向きというべきですが、お堂の向きは必ずしも南向きとは限りません。」とあります。

「https://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q10170307260」には両部曼荼羅は「本来は立体的に配置するもの。つまり、ご本尊様の真横に並べて配置するのではなく、ご本尊様に対して垂直に、ご本尊様を両側から挟むように配置するもの。だから私達からすると、正面にご本尊様、右サイドに胎蔵界曼荼羅、左サイドに金剛界曼荼羅という形になります。下の図－３aは成田山新勝寺の画像（分かり難い）ですが、左側の端（囲んだ所）に金剛界曼荼羅が見えていますよね。」とあります。
この金剛界曼荼羅絵図は、確かに前記図－３bの右端の囲んだ所の絵図と一致します。

図－３a

図－３b

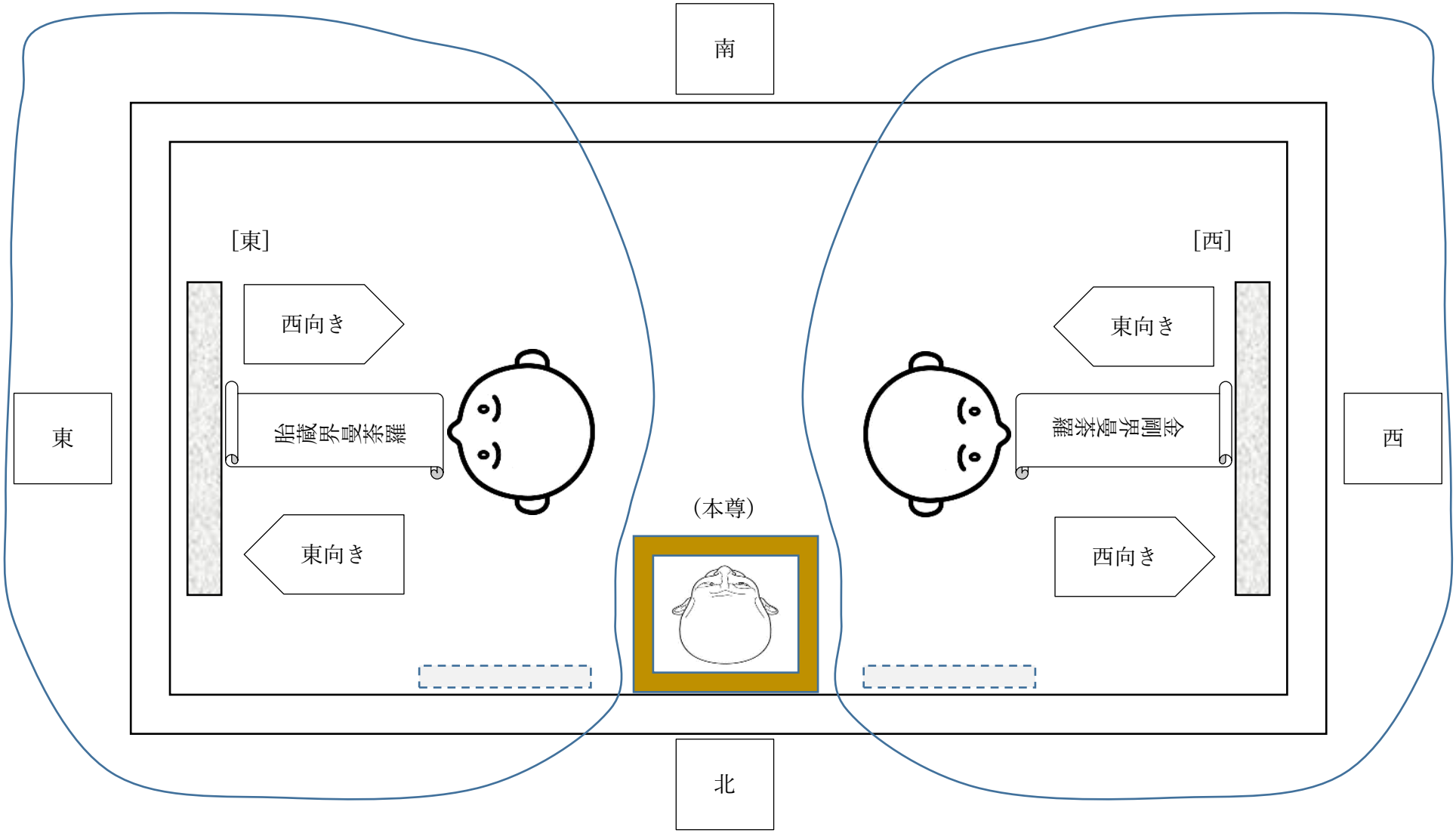
その掲示配置は次のとおりです、胎蔵界は前記図－１のように東を正位上方として、金剛界は前記図－２のように西を正位上方として祀ります。言い換えると、胎蔵界を**東側**に、すなわち西向きを正位とし、金剛界を**西側**に、すなわち東向きを正位として対面させます。本尊の直ぐ隣に懸垂する場合は、本尊から見て右隣に金剛界を、左隣に胎蔵界を配置するのが一般的であります。

本尊は北を背に座します、左手側（左方は東側）に胎蔵界が、右手側（右方は西側）に金剛界が座して、対面することになります。

「天帝太一は北を背に座す、よって、太陽が昇る東が上、太陽が沈む西がした、いわゆる左上・右下の思想」に繋がります。

以上を纏めると図－４のとおりとなります。

2022(R4)年3月23日（水）、奈良県飛鳥寺――推古4年(596)、仏教を保護した蘇我馬子の発願により日本初の本格的寺院として完成した。――を拝観した時に確認したら同図のとおりでありました。

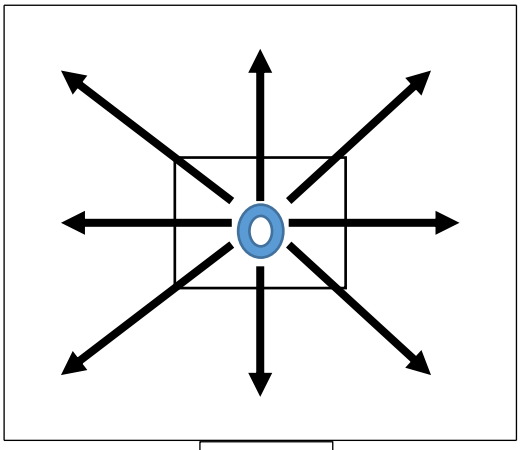


図－４ａ

図－4b

その３；全体構造の意味する処は次のとおり。

胎蔵界曼陀羅は、母親の胎内に宿る胎児の時から人間に備わっている仏性の種子が、仏の慈悲によって目覚め、育ち、花咲かせ、悟りという実を結ぶ過程を描いたものです。中央の大日如来の慈悲が世界の至る処に遍満するように放射状（図－5）の働きを表しています。古代インドで知られたあらゆる仏菩薩や異教の神々までを、一つのパンテオン（万神殿）として視覚化しています。密教の持つ抱擁精神を表し、そのような宇宙の森羅万象の悉（ことごとく）を含んでいるという意味から、極大の世界、マクロコスモスとも称されています。



図－5

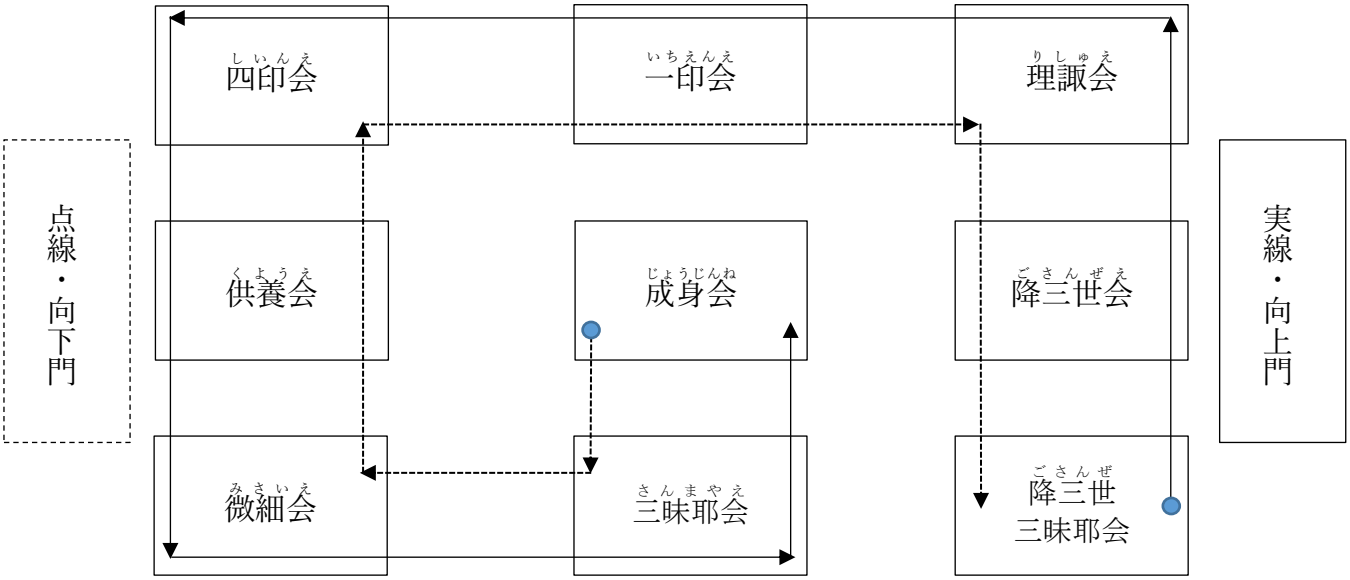
金剛界曼荼羅は、ダイヤモンドのように永遠に壊れることのない堅固な悟りの過程を描いたものです。図－6abのように、均等に分割された九つのブロック（九会（くえ））の集合で表わし、「の」の字の渦巻き構造になっており、時計回り（図－6a）に見れば、悟りを開いた仏が人々の元に下って教えを説く道筋（向下門（こうげもん）／遠心構造）を、反時計回り（図－6b）に見れば、凡夫（ぼんぶ）が悟りに向かう道筋（向上門（こうじょうもん）／求心構造）を表しています。左右は真逆の関係にあるが、所詮は一つのものの出来事であり発展系であります。

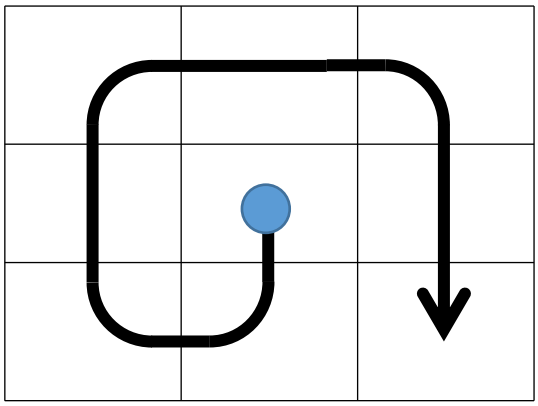
胎蔵界は仏の大慈大悲の心が人間世界に開いて行く過程を見せるのに対して、金剛界はこちらは我々の心の動きが、仏に届く過程を表現しています。

様々な（仏）・菩薩・明王などを登場させたが、優劣・上下の序列を作っているものではなく、平等に置き、中方配置大日如来の性格の一部をそれぞれが担っている表現です。ここには、排除や選別の思想はまったくありません、世界にあるもの全てのそれぞれの違いを抱擁しつつ平等に受け入れる姿勢を表現しています。

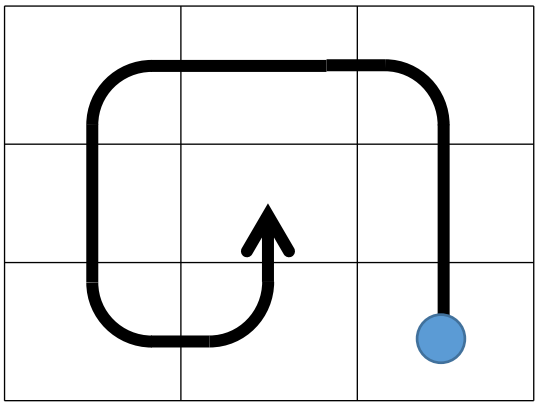
図－５（胎蔵界）と図－６ab（金剛界）には放射系という共通点があるが、前者は円弧の延長線上にあり、後者は明らかに直線の延長上にあります。胎蔵は女性原理、つまり円弧的なのにここにくると直線に照応するようになります。金剛は男性原理、つまり直線的なのにここに来ると円弧に照応し、逆転の相互関係に発展して、中和・中性化の意義をも内包していると見えます。いわば陰中陽有り、陽中陰有りの世界を説いていることに共通点があります。

その４；結局は、宇宙の構造（仏の世界）は、金剛界と胎蔵界を合体した金胎両部界が曼荼羅の真髄ということになります。これら曼荼羅絵図の意図する処は、一つのものの中に違うものが混ざり、逆に一見違うものと見える・思えるものは一つに他ならないということであります。理智不二、金胎不二、形影一如、身心一如、表裏一体の世界を説いているのではないかと思う。それぞれが違うからこその存在意義、相応の価値があるという教えであろう。





図－6a
(向下門)



図－6b
(向上門)

八葉の八とは仏教の八識－－八種類の意識作用をいう。①眼識・②耳識・③鼻識・④舌識・⑤身識、⑥意識、⑦末那識、⑧阿頼耶識をいう。⑥意識は、その前五識（①～⑤）を統括している心であり、私達が普段生活をしていて「分かる」ことの認識をいう。⑦・⑧は無意識層の心のことであります。

このような密教、すなわち曼荼羅の説く世界は、単なる架空や観念的な仏法ではなく、人間が生きるこの世の実相・実態に教訓を吹き込む精神・哲学であると思います。

その５；金剛界曼荼羅には回転運動要素が、胎蔵界曼荼羅には直線運動要素が入っています。回転の言葉からは渦巻運動へと発展連想します。渦巻には右巻きと左巻きがあり、さらには拡大と縮小も絡んで来ます。そこに立体系の三角錐にも繋がって来ます。三角錐も上下二つの組み合わせの可能性出現です。このことは、私の主観によるもののみなまらず、密教曼荼羅には一方に固定・拘泥しない融通無碍の、すなわち仏教の真髄「空」の思想が溶け込んでいるものと思っています。

(end)